

矢のくさり

昔むかし、あるところに、なかのよいふたりの少年がいました。いつぼうの少年は村長むらぢぢの息子で、村のまんやかに家があり、もういつぼうの少年はお金持ちの息子で、村はずれに家がありました。ふたりは、家を行き来して、いつもたくさんの矢を作っては、一本のこらずおれてしまうまで射いて遊びました。

あるとき、ふたりは、どちらがたくさん矢を作れるか競争きょうそうしようと思いました。

さて、村のうしろに丘おかがあつて、丘のてっぺんに、ふたりが遊び場あそびばにしている草地がありました。ある月夜のばん、ふたりは矢を作ろうと丘へ登つていきました。先を歩いてきた村長の息子が、

「ねえ、あの月を見てごらん。ぼくのおかあさんのくちびるのかざりにそっくりだ」といいました。金持ちの息子は、

「だめだよ。月のことをそんなふうにいっちゃいけないよ」とたしなめました。

そのときとつぜん、あたりがまつくらになつて、にじのような大きな輪わがあらわれました。そして、それが消えると、金持ちの息子はいなくなっていました。村長の息子は、友だちの名を何度もよびましたが、返事はありません。

(きつと、あのにじの輪からにげて、丘をかけ登つたんだ)

村長の息子はそう考えて、丘に登りました。てっぺんまで行きましたが、友だちはいません。

(そうだ。月があの子をつれていったにちがいない。あのにじの輪はお月さまだったんだ)

村長の息子は、ひとりぼっちになつて、こしをおろして泣なきました。泣いてしまうと、こんどは、月に向かつて矢を射はじめました。つきからつきへと矢を放ちましたが、みな落ちてきます。矢は、つきつきにおれてしまいました。でも、かたい木で作った矢だけはこのこりました。そこで、

(よし、月のとなりにあるあの大きな明るい星を射てみよう)と考えました。少年は、その星めがけて矢を放ちました。すると、その星が黒くなりました。少年は、自分と友だちが作ったたくさんの矢を、その星めがけてどんどん射はじめました。矢は一本も落

ちてきません。

少年の射た矢は、先の矢をつらぬき、つぎつぎにくつついて、長くさりになりました。少年は、さいごの矢を射てしまうと、つかれはてて、矢のくさりの下で横になり、ねむりこんでしまいました。

しばらくして少年が目をさますと、矢のくさはなくなっていて、かわりに、天までとどく長いはしごがありました。少年は、

（このはしごをのぼって行って、友だちを見つけよう）と考えました。そして、いろいろな木のえだを頭の髪かざりにさして、はしごをのぼりはじめました。

夜になるとはしごの上でねて、つぎの朝、またのぼっていきました。二日目の朝早く、目をさますと、頭がとても重かったので、髪かざりにさしてある木いちごのえだをぬいてみました。すると、木いちごの実がすずなりになっていました。少年は、おなかがいっていたので、木いちごをすっかり食べてしまいました。すると、力がわいてきて、えだをまた髪かざりにもどして、上へ上へのぼっていきました。

お昼になると、また頭が重くなりました。そこで、こんどは頭の反対がわのえだをぬくと、青いコケモモがすずなりになっていました。少年はそれを食べて、またのぼっていきました。

あくる日のお昼ごろ、また頭が重くなったので、頭のうしろがわのえだをぬくと、赤いコケモモがすずなりになっていました。それを食べてまたのぼっていきました。

ようやくつぺんまでのぼりつめました。あたりを見まわすと、むこうに大きな湖が見えました。少年は、へとへとにつかれていたので、やわらかな草とこけを集めてそのうえで横になり、ねむってしまいました。

いきなり、だれかが少年をゆさぶりました。

「起きなさい。あなたをさがしていたんです」

少年ははっと目をさまして起きあがりましたが、まわりにはだれもいません。そこで、ごろりと横になるとねたふりをして、うす目をあけて見ていました。すると、はるかむこうから、とても小さな美しいむすめがやって来るのが見えました。むすめは、小ざつぱりした皮の服を着て、くつ下はヤマアラシのはりでかざってありました。むすめが手をのばして少年をゆさぶろうとしたとき、少年は、目をあげ、

「とつくに目をさまして、あなたを見ていましたよ」といいました。むすめは、

「わたしのおばあさんが、あなたをつれておいでといって、わたしをよこしたんです」といいました。そこで、少年はむすめについていきました。すると、たいそう小さな家に着きました。そこにおばあさんがいて、

「おまえ、こんなところまで、何を追いかけてきたんだね」とききました。

「ぼくの友だちを追いかけてきたの。ここへつれてこられたんだ」と、少年が答えると、おばあさんはいいました。

「ああ、あの子はとなりの家にいるよ。お月さんの家だよ。毎日泣いているのが聞こえるよ。でもまあ、何か一口食べてお行き。長い旅でおなががぺこぺこだろう」

おばあさんが口に手をあてると、お皿の上に鮭さけがあらわれました。おばあさんが口に手をあてるたびに、飲み物や肉がつきつきに出てきました。少年がおなかいっぱいになると、おばあさんは、トウヒ*まっの松かさまとバラの木とモクセイのえだと、小さな砥石*とをくれれて、

「これを持って行って、友だちを助けておやり」といいました。

少年が月の家に向かって歩いていくと、金持ちの息子が金切り声をあげて泣いているのが聞こえてきました。月の家に着くと、少年は屋根にあがり、えんとつから下りていて、友だちを見つけました。

「来るんだ。君を助けにきたんだ」

少年はそういうと、友だちがとらえられていた場所にトウヒの松かさを置いて、

「この子の泣き声をまねろ」と命じて、ふたりでにげだしました。

ところがしばらくすると、トウヒの松かさがころげおち、月の家の人たちは、金持ちの息子がにげたことに気づきました。そこで、月が追いかけてきました。

村長の息子は、走りながら、モクセイのえだを後ろに投げました。すると、モクセイの木が高くそびえて、月の光も通さないほど花がさきほこりました。そのまにふたりはにげました。けれども、月はまた追いついてきました。

村長の息子は、こんどはバラの木を後ろに投げました。するとバラの大きなしげみがあらわれたので、月はまた、おくれれてしまいました。けれどもまた追いついてきました。

村長の息子は、砥石を後ろに投げました。すると、深い深い絶壁ぜっぺきがあらわれ、月はそこからころがりおちていきました。

おばあさんの家に着くと、少年たちはだきあつて、よろこびあいました。

おばあさんは、ふたりに食べ物をやってから、村長の息子にいいました。

「さあ、行って、さいしよに登ってきたとき横になってたところで横になるんだよ。そして、おまえたちがいつも遊んでいたあの丘のことを考えるんだ。けっしてほかのことを考えてはいけないよ」

ふたりは、村長の息子が横になっていたところまで行きました。そして、そこで横になりましたが、金持ちの息子は、あのおばあさんの家のことを考えてしまいました。そのとたん、ふたりはおばあさんの家にもどってしまいました。おばあさんは、

「さあ、行って、わたしのことなども考えるんじゃないよ。丘のことだけを考えるんだよ」といいました。

ふたりはもういちど行って、丘のことだけを考えました。

目がさめると、ふたりは、矢のくさがりが下がっていたあの丘の上でねていました。村長の家のほうから、たいこの音が聞こえました。それは、おそうしきのおどりのたいこでした。村長の息子は、

「行ってみよう」といいましたが、金持ちの息子は、

「いや、おそうしきが終わるまで、ここで待ったほうがいいよ」と引き止めました。

しばらくするとたいこの音が止んだので、ふたりは村長の家に向かいました。庭のすみのくらがりに立って見ていると、顔を黒くぬった村の人たちが、家から出て帰っていました。そして、さいごに、村長の息子の弟が戸口から出てきました。村長の息子は、弟に、

「おい、ぼくだよ。こっちへ来い」と、声をかけました。弟はびっくりして、こわがって家のなかにとびこみました。そして母親に、

「外にお兄ちゃんと友だちがいるよ」といいました。母親は、

「どうしてそんなことをいうんだい。お兄ちゃんは死んじゃったの知らないのかい」としかりました。けれども、弟は、

「ぼく、お兄ちゃんの声も知ってるし顔も知ってるよ」といいはりました。母親は、信じることができません。すると弟が、

「じゃあ、お兄ちゃんのシャツの切れはしを持ってくる」といって、とびだしていきました。

弟がシャツの切れはしを持ってくると、母親はやっと、息子が生きて帰ってきたこと

を知りました。そこで、いそいで、ふたりの少年を中に入れ、金持ちの家にも知らせました。村の人たちもみな集まってきた、みんなでふたりの帰りをよろこびあいました。

トウヒ マツ科の樹木じゅもく

砥石はもの 刃物などをといですろと鋭くするための道具

出典 『語りの森昔話集1おんちよろちよろ』村上郁再話
原話 『アメリカインディアンの民話』皆河宗一／岩崎美術社